# おばあちゃんと出会う

上垣内伸子

「さあ、そろそろ始めるかね。
はい、みなさんこんにちは。
今日の私の話は『かもとりごんべえ』です。これは、
むかしむかしの話だね。
かもとりごんべえ。ぶん、さいごうたけひこ。え、せ
がわやすお

いまの　よに、だれしらぬ
もののない　かもとりごんべえと
いう　おとこは、なにを　かくそう
この　わしのことなのさ。
おもえば、もう　ずいぶんと
まえの　ことだが、わしが
かりゅうどを　している　ころの
ことだった。
わしは　まいにち、かもを

## 一わ　とっては　まちへ――――(1)

Kさんのよく通る太い声に、さっきから子ども達は身じろぎ一つせず引き込まれている。とある土曜の昼下り、月に一度の『折り紙と絵本の読みきかせの会』が始まった。市立図書館と棟続きの市民センターの和室。常連の子ども達が十四～五人、畳の上に思い思いの格好ですわり込んでいる。どこの町でもよくみかける、図書館主催の読みきかせの会の風景だ。

現在私の住んでいる東京近郊の住宅地あたりでは、こうした会の担い手は、若いお母さん方であることが多い。ところが、このKさんは、そのまたお母さんくらいの年齢、次にお話をするHさんも同じくらい。おばあちゃんの手になる読みきかせの会である。

ここは、東北の南部に位置するK市。東・西・南の三方をなだらかな山々に囲まれ、阿武隅川沿いにひらけた、人口約三万人の小都市である。見渡す限りササニシキの水田が広がり、住民の半数近くが農業に従事する農業地帯だ。東北地方の他の農家と同様に、田仕事の主体はおじいさんとお嫁さん、おばあさんは家事や子守りという図式がこの町でも成り立っているらしく、昼間は買い物姿の年配の女性や小さい子どもの姿をみかけることが多い。市民活動の中心も五十代、六十代の女性であり、この読みきかせの会のメンバーも、ほとんどがおばあちゃんというわけである。

私は、ふとしたきっかけで、昭和五十九年から二年間この町に住み、読みきかせの会の活動にも参加させていただいた。そこで体験した子どもとおばあちゃんの出会いの楽しさを紹介してみたい。

「――――すると　みんなは、大きな　ふろしきを
　下に　ひろげ、さかんに　手を　ふって、
　とびおりろと　あいずする。
　ええ　ままよ、ひとおもいに　おもいきって、
　まっさかさまに　とびおりた。

ごっつん
ぱっ

目から　火がでて、
なにもかも　もえちまった。

のこったのは
わしの　はなしだけ……。
あっ　は　は　は　は。(2)

はい、おしまい。」

大きな笑い声でKさんの話が終わった。

Kさんは、ずっとこの町の小学校の教員をなさっていたそうで、今でも町では「K先生」と皆んなから呼ばれている。大柄で一見男性的な印象だが、とてもユーモアのある方だ。その低くてよく響く声と、ひょうひょうとした語り口で民話を読まれる時、子ども達は一気にその世界に引きこまれていく。いろりの端で年寄りからむかしの話を聞いている――そんな空間がそこに生まれるかのようだ。民話は、よく教科書にも載せられており、ストーリーを知っている子どもも少なくはないが、Kさんによって語られる時、その話は子ども達の心の中に、一層鮮やかなイメージをもたらすのだろう。

続いて登場するのはHさん。Kさんとは対照的な小柄なおばあちゃん。ひかえめな方ではあるが、その穏やかな性格からか人望が厚く、よくいろいろな世話役をたのまれるとか。さて、今日の話は『やまんばのにしき』

「そこで　また、みんな　ひたいを　よせて
そうだんしたが、なにしろ　おそろしい
やまんばが　いると　いう　山だもの、
いった　ものは　たれひとり　おらん。
すると　あかざばんばと　よばれている

七十いくつの　ばあさまが　でてきて、
「それなら　おらが　いっしょに　いって
やるべ、なに　いこうと　おもえば、
みちなんぞ　いくらも　あるもんだ」
そう　いって、あんない　かってでたと。
はなしが　きまったので、ねぎそべと
だだはちは　もちを　かつぎ、あかざばんばが
さきにたって、いよいよ　ちょうふく
やまへ　のぼることに　なった。――――」

聞いているうちに、読み手のHさんと、やまんばの住む『ちょうふくやま』の道案内をかってでた『あかざばんば』とがオーバーラップされてくる。絵本に描かれた『あかざばんば』が、どことなくHさんに似ているように思えてくる。

「なんのなんの、なんでも　ねえと
おもえば、なんでもねえもんだ。
さあさあ、げんきを　だして、
いくべ　いくべ(4)」

会話の部分もまるで普段のままの語り口。もう誰もかなわない。だんだんと、やまんばのところへ行くのは、このHさんではないかという気がしてくる。この話も、知っている子どもの多い話だが、聞き手の子ども達は、どうなることかと、足をモジモジさせながら聞いている。

もちろん、熟練したストーリーテラーは、性別や年齢や、またとり上げる素材に関係なく、聞き手をその物語の世界に引き込んでいくに違いないだろう。しかしながら、『かもとりごんべえ』や『やまんばのにしき』といった日本の民話をKさんやHさんが語る時の、お二人の年齢とか着ている物とか少し東北のなまりのある語り口とかが酵し出す独特の雰囲気――記号としての〝おばあちゃん〟とでもいうのか――も、他の誰もが真似ることのできない得がたいものであり、まさしく民話の世

界の具現化、〝おばあちゃん〟の世界の展開であるように思う。

ここK市における、おばあちゃんの読みきかせの会の成立は、兼業農家の多い農業地帯といろりという生活環境の必然がもたらしたものではあったが、子どもとおばあちゃんというこの組み合わせは、必然ということばだけでは言い尽くせない楽しさを生み出しているようだ。それは、聞き手の子ども達にとっては、学校生活や友だちとの遊びとは異なった〝おばあちゃん〟の世界と出会う楽しさかもしれないし、読み手のおばあちゃんにとっては、子どもとのふれあいによって自らも童心に帰る楽しさかもしれない。

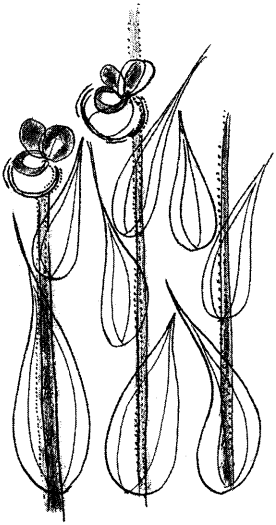
童子論の援用を待つまでもなく、子どもと老人は、とらわれの知らない心の自由さ、体にとり込んでいる時の流れのゆるやかさにおいて共通する存在であり、相互に変身しうる可能性を持った存在であるように思う。読みきかせの会は、絵本（ここでは民話）を接点とした互いの心の世界が出会う端の一つだとは考えられないだろうか。おばあちゃんの心の中にいる〝子ども〟が、絵本をきっかけに飛び出してきて、聞き手である子どもと交流する――そんな楽しさに、この会は支えられているのではないだろうか。

＊

こうしたおばあちゃんの絵本の読みきかせの会の楽しさを経験した後、再び東京へ戻ってきた。現在住んでいるのは近効のベッドタウンである。ふと気がつくと、周りにおばあちゃんがいなくなっている。読みきかせの会はもちろんのこと、様々な市民活動の中にも老人の姿は少ない。都市部に住む核家族にとって、老人と出会うことはむずかしいことなのだろうか。次々と押しよせる仕事に追われ、コマ切れの時を積み重ねていく日々の中で、K市でのおばあちゃんの読みきかせの会のひとときが、かけがえのないものとして思い出されてくる。

単に伝統文化の継承という観点からのみ、〈老人――→

子ども〉という縦のつながりを考えるのではなく、また母（親）に替わる保育者としてだけとらえるのでもなく、子どもとどこか相通じる時空間の伸びやかさを心の中に持った存在として、子どもの育ちのかたわらに、おじいちゃん、おばあちゃんがいて欲しいものである。

〈引用文献〉
(1)・(2) かもとりごんべえ　文・西郷竹彦　絵・瀬川康男
ポプラ社　昭和四十六年
(3)・(4) やまんばのにしき　文・松谷みよ子　絵・瀬川康男
ポプラ社　昭和四十二年
〈参考文献〉
囲碁の民話学　大室幹雄　せりか書房　昭和六十二年

（お茶の水女子大）